

私は家族とともに、スペインで11年間を過ごしました。駐在したナバラ州パンプロナ市は、牛追い祭で有名な美しい街。近くにはキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルが生まれた城もあります。今、この街はスペインの紙芝居文化の発信地になっています。

州の教育省は、専任の研究員を置いて紙芝居の教育的活用を推進しています。州立図書館の所蔵する作品は100点を超え、様々な団体や個人に貸しだされています。紙芝居の講座もさかんで、昨年は『紙芝居の演じ方Q&A』のスペイン語版とバスク語版が出版されました。日本から「紙芝居文化の会」の支えもあり、紙芝居はすっかり根づいています。はじまりは私のつたない「ももたろう」の手づくり紙芝居でした。

10年ほど前のこと、娘が通う現地小学校の国際理解の行事で、日本の民話を紹介する依頼を受けました。ところが、私は人前で話すことが苦手な上、スペイン語も不自由。悩

んだ末に「ももたろう」の紙芝居を手づくりしました。つたない絵や脚本でしたが、気迫が伝わったのでしょうか。低学年の生徒たちが驚くほど集中し、楽しんでくれました。その様子を見たカルメン先生が「子どもたちは魔法にかかったみたいだった。教育者としてその秘密を知りたい。是非、紙芝居を教えてほしい」と熱望して、小学校に〈紙芝居クラブ〉ができました。5年生が紙芝居を演じたり創作するクラブです。試行錯誤の日々でしたが、コマ割りの下書きを使う方法を導入すると、子どもたちは物語の流れを上手につかめるようになりました。カルメン先生は「演じることはもちろん、手づくりの紙芝居を制作するすべての過程に無限の教育的可能性がある」と言います。このクラブ活動は、教育省でもっともすぐれた活動に選ばれ、「ももたろう」や子どもたちの紙芝居作品も出版されました。今、紙芝居は小学校のカリキュラムとして活用されています。

州立ヤマグチ図書館の紙芝居コレクションは、奇跡のよ



うにはじまりました。「紙芝居の本当の魅力を学ぶために、日本のすぐれた作品に触れたい」という要望が小学校教諭の間で高まっていましたが、紹介したくても個人の力では、八方ふさがりでした。そんなときに、山口市とパンプロナ市の姉妹都市交流があり、友情の証に、山口市から日本の書籍と紙芝居をいただくことになったのです。これを機に、州立図書館に紙芝居の翻訳をするグループもできました。スペイン語の良い脚本にするためには、文学だけでなく文化全般、発達心理にいたるまで深い造詣が必要です。素晴らしいメンバーがそろいました。メンバーのひとり、ロリイは、語り聞かせの専門家でもあります。彼女は語り聞かせと紙芝居の違いについて「大勢の前で演じるということ

では似ているが、物語世界への入り方がまったく違う」と言います。語り聞かせでは、観客はそれぞれの人生経験をもとに、自分だけの物語世界を旅する。一方、紙芝居は、舞台から出きて広がる物語世界をみなで楽しみ、分かち合うことができる。この手法、この感覚はスペインになかった」と。彼女は紙芝居講座で、この新しい感覚のことを「キョウカン(共感)」と教えています。スペイン語にはKから始まる単語はありませんが、すっかり定着したKamishibai同様に、Kyokanという言葉・感覚も広がっています。

今日もスペインで、Kamishibaiを通してたくさんの方が出会い、素敵な時間を過ごしているに違いありません。それを、まるで紙芝居の魔法のように思います。